

うねむれいだ

有年牟礼・井田遺跡

現地説明会資料

平成20年3月2日（日） 午後1時～

事業主体：赤穂市地域整備部区画整理課

調査主体：赤穂市教育委員会

はじめに

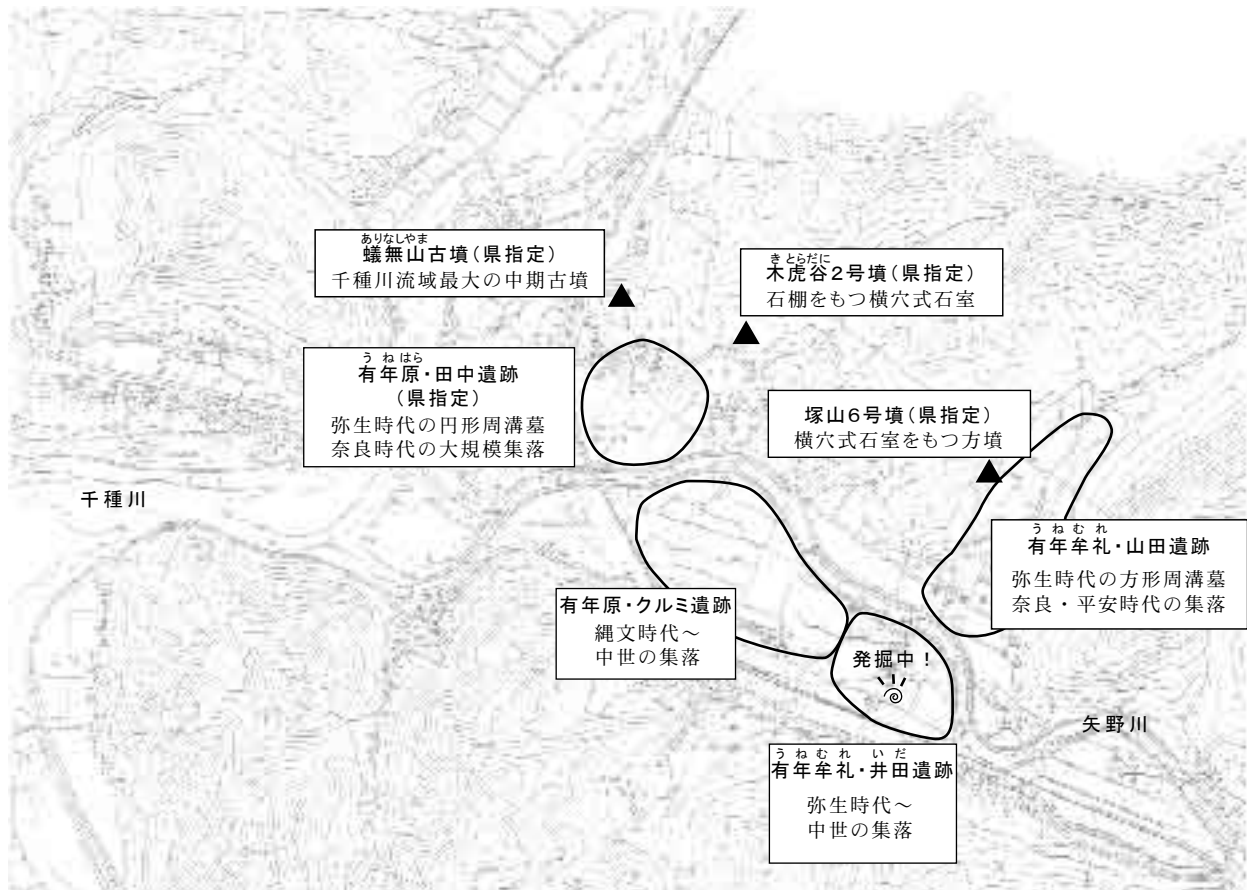
赤穂市教育委員会では、有年土地区画整理事業に伴い、昨年度から発掘調査を実施しています。昨年度は有年原・クルミ遺跡の発掘調査を行い、縄文時代～中世の遺跡を発見することができました。

今年度は全体で4,600㎡の調査を行っています。本日説明する調査区は3回目の調査になり、調査面積は1,200㎡です。

今回の調査では、室町時代（14～15世紀）の集落跡が見つかったほか、予想もしていなかった弥生時代の竪穴住居（焼失住居）が見つかりました。今日は、住居が焼けた様子を実際に見ていただき、その意義についてお話したいと思います。

周辺の遺跡

みなさんご存知のように、赤穂市北部の有年地域は「文化財の宝庫」と言われ、多くの文化財が残されています。有年牟礼・井田遺跡の周辺でも、矢野川北岸には多くの貴重な遺跡が見つかり、兵庫県指定文化財を初めとした多くの遺跡があります。しかしこれまで、矢野川南岸の様子明らかではありませんでした。昨年度からの発掘調査によって、ようやくその実態が判明してきたのです。

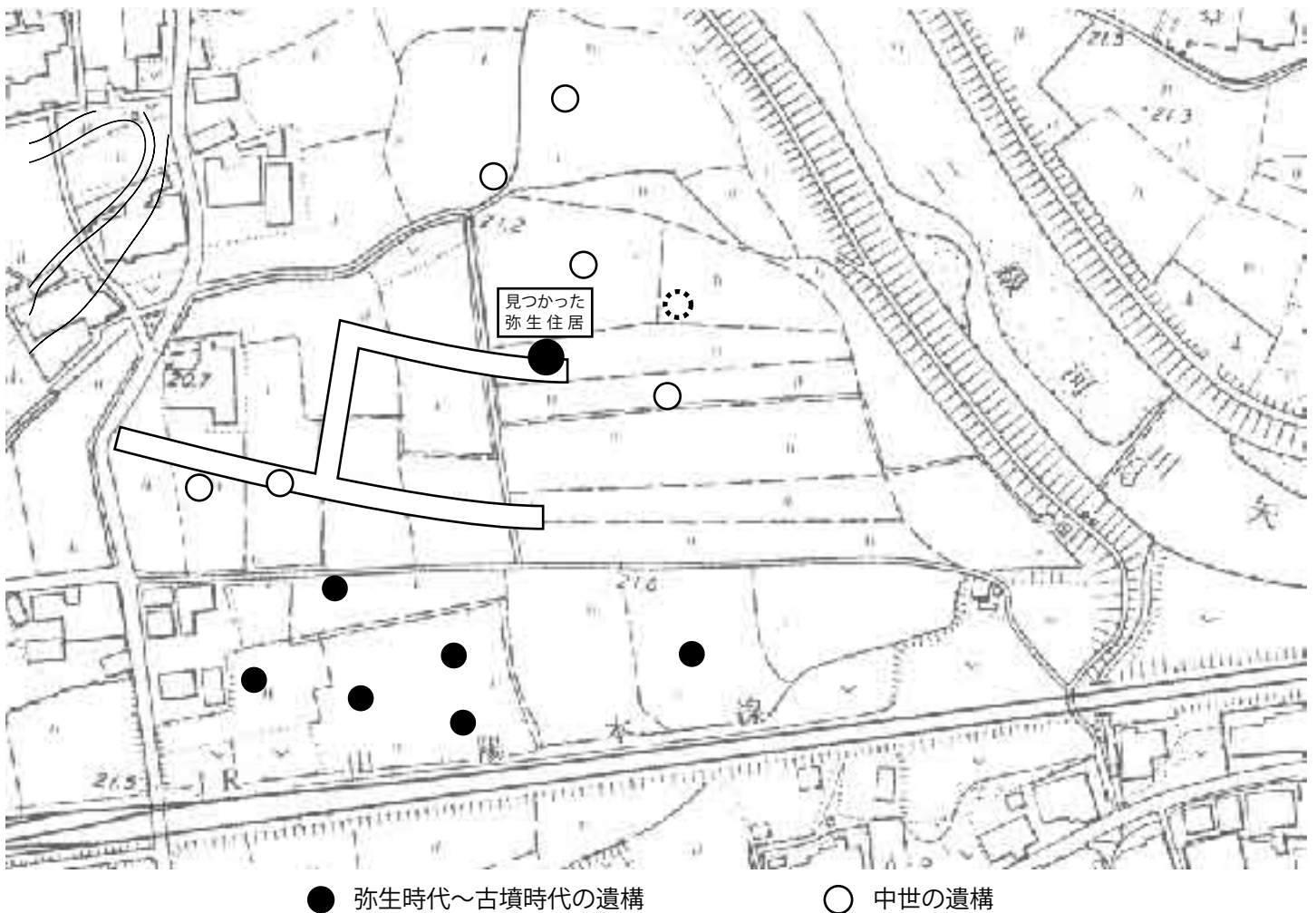


最近の調査

最近にわかにクローズアップされてきた矢野川南岸の遺跡ですが、赤穂市教育委員会では平成9年度、10年度、14年度に遺跡の有無を調べるための確認調査を行っています。有年牟礼・井田遺跡は、その中で平成14年度に確認調査が行われ、弥生時代～中世の集落跡であると推定されました。

しかし、遺構の見つかった場所や、昔の地形復元などを併せて考えると、弥生時代の集落はより南側にあると考えていたのです。

下の図は、確認調査で見つかった遺構の分布図です。JR線側に古い時代の遺構があり、北側では中世の遺構しか見つからなかったのです。そのため、この場所は南側の丘陵から続く緩い傾斜地であり、中世の遺構が見つかった範囲は、新しく地面が出来た場所なのではないか、と推定していました。

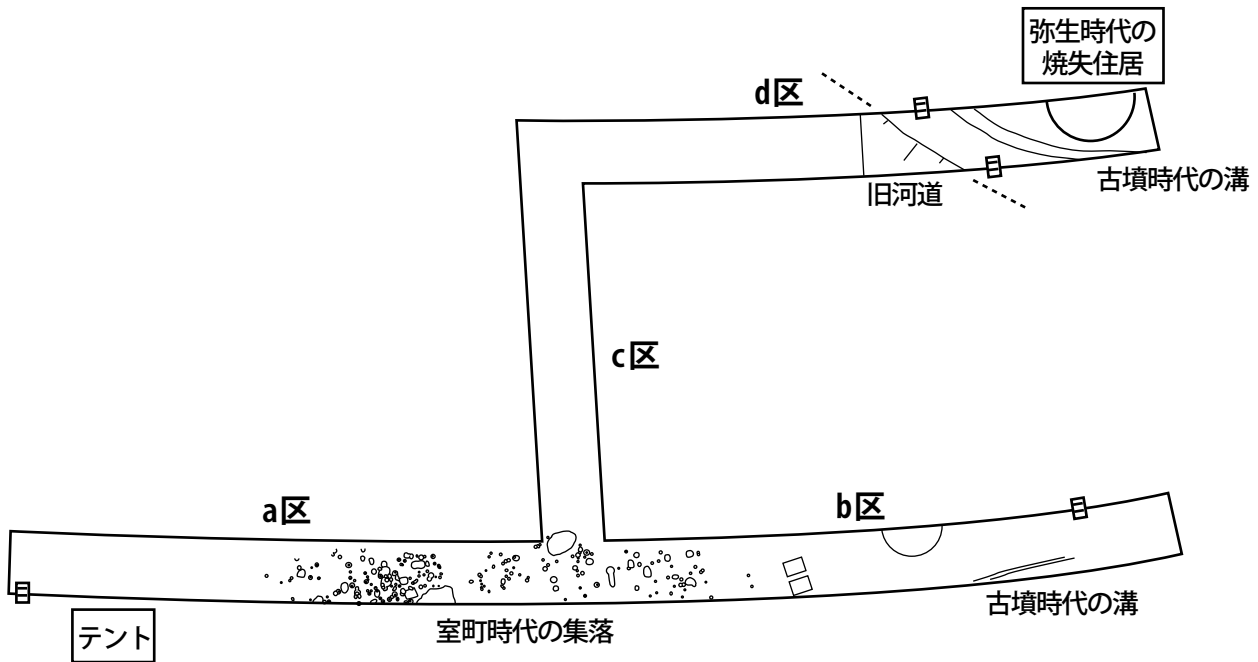


平成14年度に行った確認調査の結果

以上のような予測をもって、今年度の発掘調査を行ったわけですが、その予想は良い意味で裏切られることになりました。次のページからは、今回の調査成果を紹介し、その意義を説明していきます。

今回の調査成果

遺構は、一定の範囲に集中して見つかりました。a・b区では室町時代の集落跡が、d区では弥生時代～古墳時代の集落跡が見つかりました。



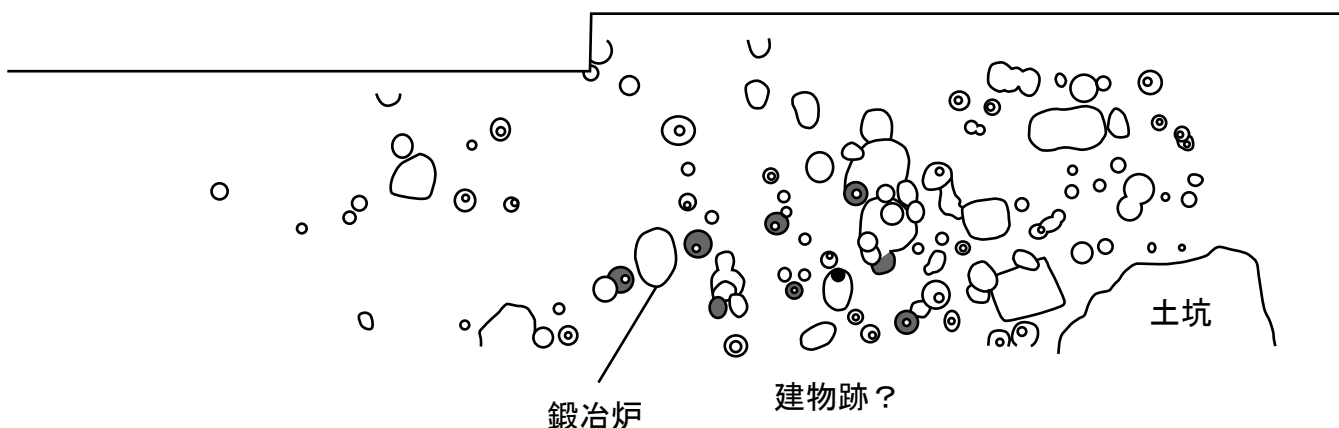
■室町時代の集落跡■

中世（鎌倉時代～室町時代）には、地面に穴を掘って直接柱を埋める「掘立柱（ほったてばしら）」によって建てられた建物が一般的です。そのため、発掘調査で「集落跡が見つかった」といっても、柱穴がたくさん見つかっただけ、とも言えます。

a～b区では、建物の柱穴跡がおよそ300基見つかりました。調査区の幅が6 mと狭いため、1棟の建物を完全に見つけることはできませんでしたが、現在の段階で、建物として認められそうなものもあります。

このように、当時の建物跡を探すのはパズルのようであり、みなさんも挑戦することができます。ぜひ、現地と図面を見て、建物跡を探してみてください。このようなパズルを経て建物跡を予測し、その後に柱穴内の土質の検討などを行うことで、建物を認定することになります。

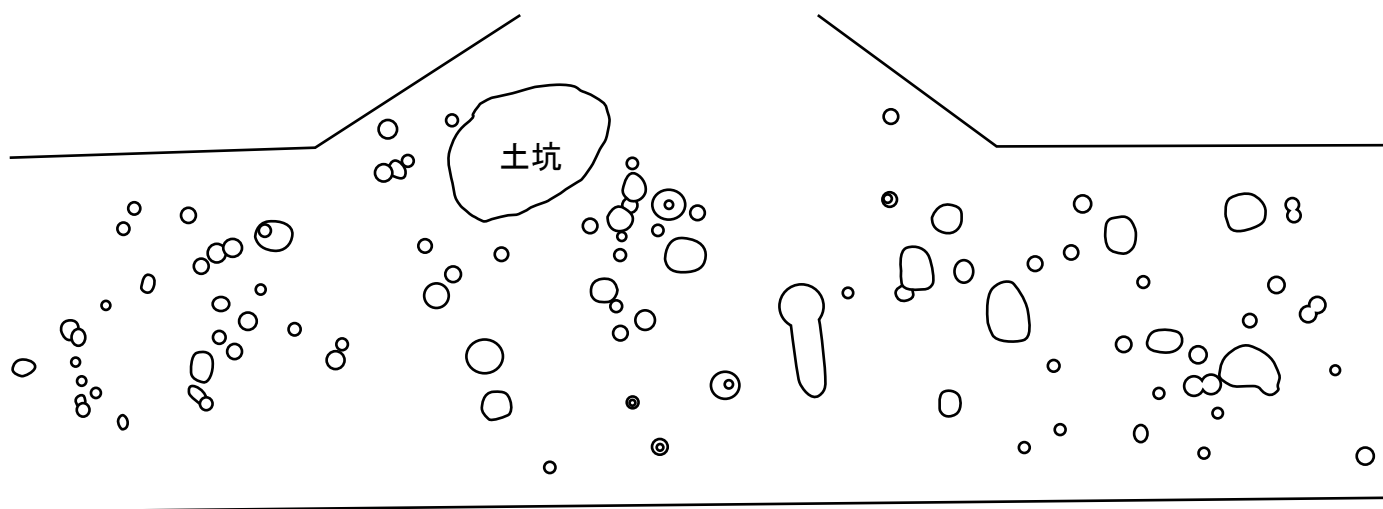
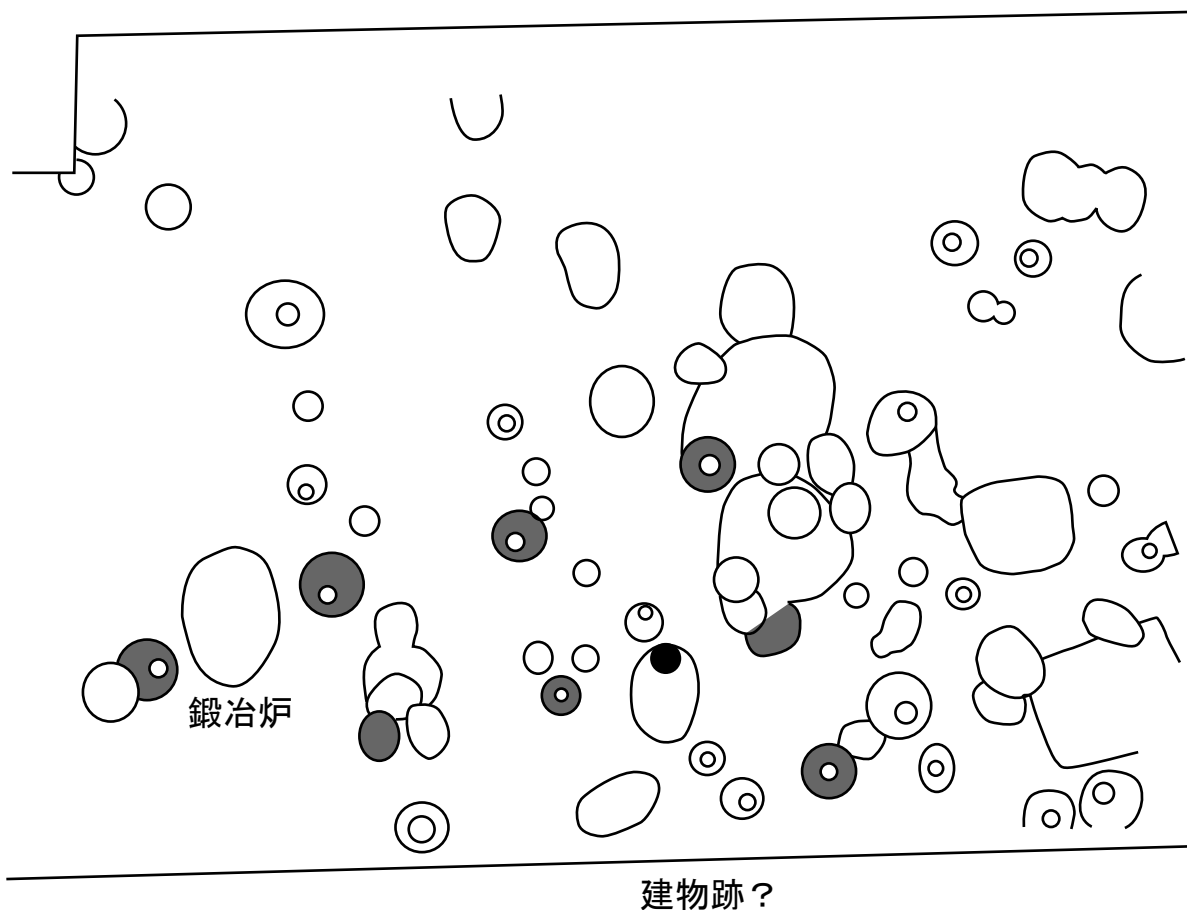
そのほか、平面図を眺めてみると、西南西～東南東方向に穴列が多く見られることから、当時の地割の角度が復元できそうです。現在の田んぼは、東西・南北方向を向いた形をしています。それ以前は古代以降に行われた「ほ場整備」による「条里地割」がありました。今回の調査で見つかった「傾き」は、その方向を示しているのかもしれませんが。



さて、下の図面は、建物らしき柱穴列のある区域を拡大したものです。周囲には「鍛冶炉」と思われる遺構が見つっています。「鍛冶炉」は普通の「穴」ですが、壁と思われる粘土と、高温で焼けたためにできた赤い土が見られ、通常に火を焚いただけではできない状況を示しています。

当時は、自前の簡易な鍛冶炉で刀や農工具の修繕を行うことが一般的で、今回見つかった鍛冶炉でも、中から同時期の土器や鉄片が出土したことから、この集落跡で利用されていたことがわかります。

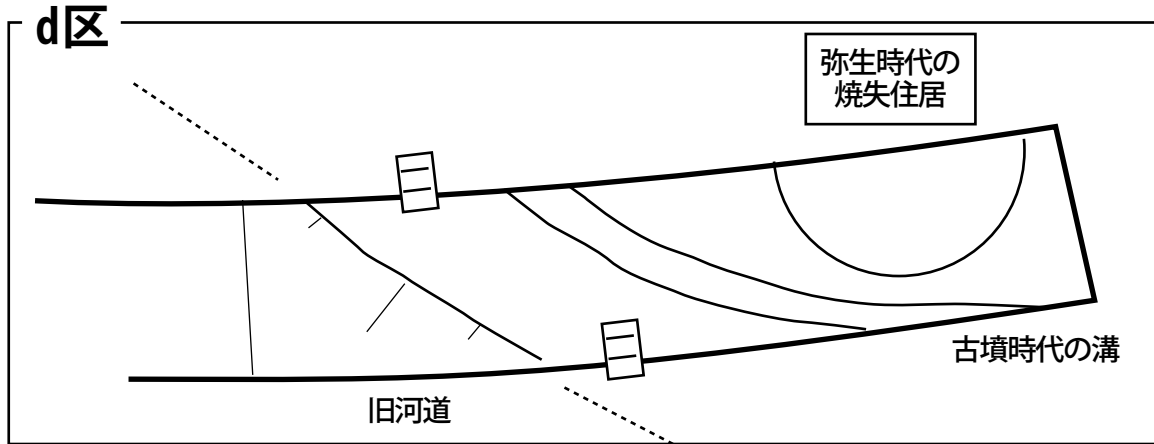
ただし、この鍛冶炉が、推定した建物と同時にあったかどうかはわかりません。



■弥生～古墳時代の遺構■

d区では、弥生時代の竪穴住居と、古墳時代の溝が見つかりました。古墳時代の溝は、断面の形が逆台形をしていて人為的に掘削されたことが明らかですが、出土土器が少ないためその性格はわかりません。

一方、弥生時代の竪穴住居は、火事で焼けた住居（焼失住居）であることが判明し、非常に多くの

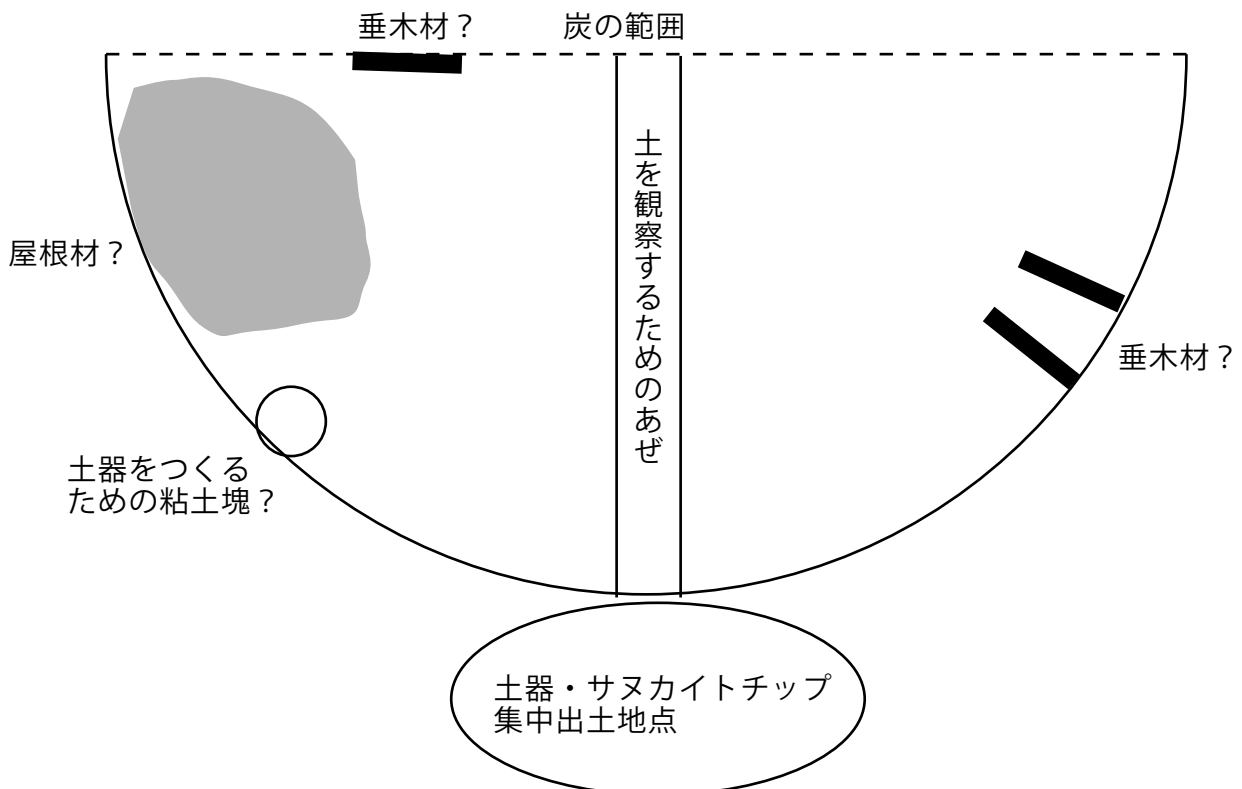


下図は、見つかった竪穴住居の模式図です。現状の形は半円形ですが残り半分は調査区外へと続いており、本来は円形をしています。

竪穴住居を見つけた今の段階でも、建物の屋根を支える垂木（たるき）材、屋根材と思われる繊維などが見つかるとともに、土器をつくるための粘土塊が見つっています。

さらに弥生土器のほか、当時の石器の材料であるサヌカイト（香川県と奈良県に分布）のチップ（破片）が現在で約50点出土しています。これまでの発掘で出土した土は持ち帰っており、「ふるい」にかけて、今後多量のサヌカイトチップが見つかることでしょう。

人が持ち運べないほど小さなサヌカイトチップが見つかるという事実は、この場所で石器を作っていた可能性が非常に高いと言えるでしょう。



■火事で焼けた原因？■

弥生時代の竪穴住居で、焼けた住居が見つかることは稀です。まず、今回の調査から言えることは、火事で焼けた後、弥生人は掃除などを何もしていないことです。

考えられる理由は、今のところ2つあります。一つは、不意の失火によって焼け出され、全焼したために内部のものをすべて諦め、別の場所に建物を建てた場合。もう一つは、ムラを捨てて移動する際、家財道具一式をすべて持ち出し、最後に火を放った場合。

このような原因を特定するには、今見つかっている炭を除去し、当時の竪穴住居の床面を見つけることで可能です。もし炭を除去して多くの生活道具が見つかったとすれば、不意の失火であり、また弥生時代の多くの情報が得られるでしょう。一方、何も出土しなければ、この井田にあったムラが、何らかの理由により破棄しなければならなかったということが言えそうです。

いずれにせよ、今後の調査によって得られることは多いと言えるでしょう。

■当時の地面は？■

これ以外にも、d区では昔の河跡（旧河道）が見つかりました。室町時代の集落跡が見つかった地面と、弥生時代の建物が見つかった地面は、土質がまったく異なります。当然、弥生時代の集落があった地面の方が古いのですが、この旧河道からは中世の遺物が出土していることから、もしかすると弥生時代当時は、河のそばに竪穴住居が建てられていたのかもしれない。

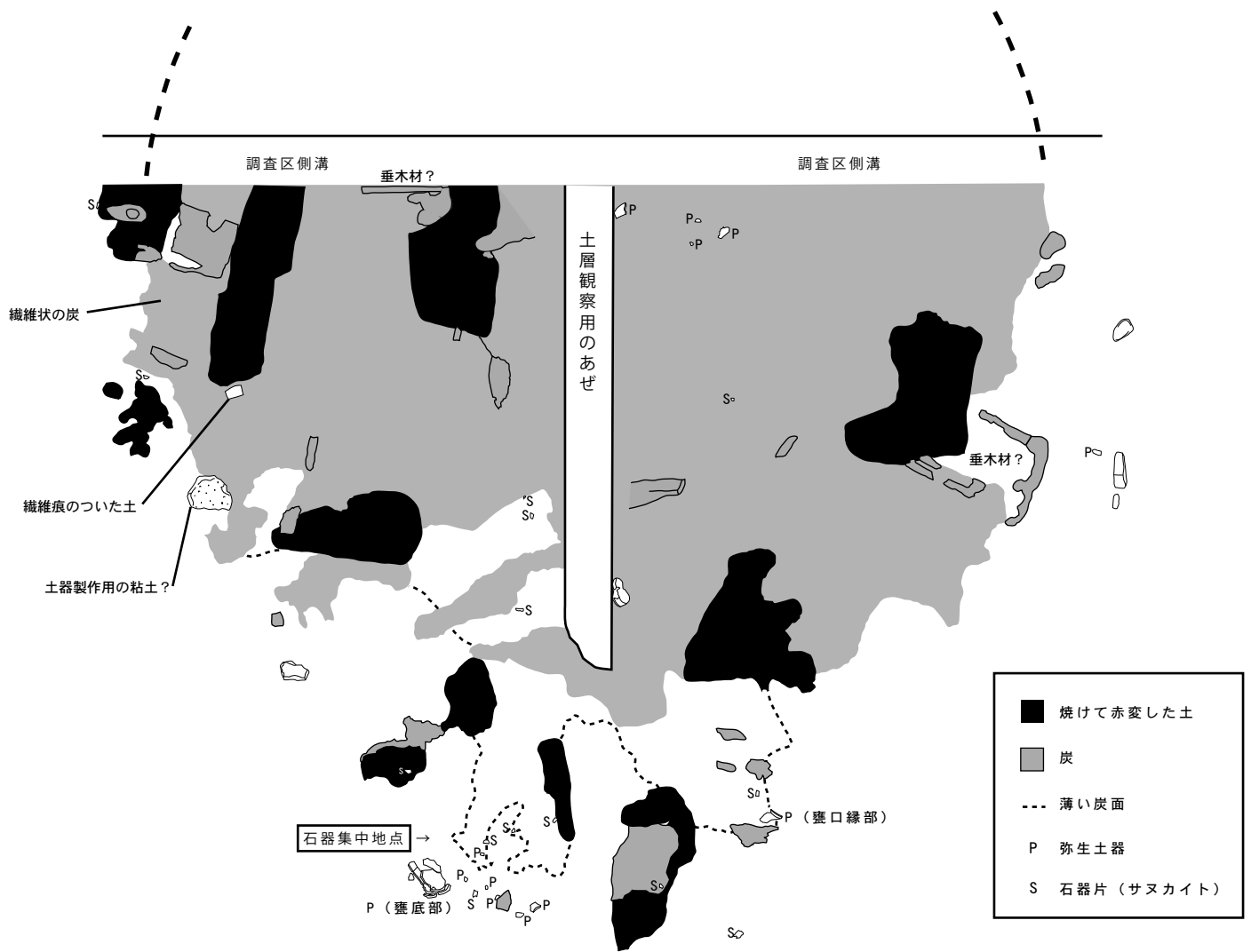
現在、私たちが普通に立っているこの地面は、案外新しく、弥生時代は非常に起伏に富んだ地形だった可能性もあります。このように、今回の調査では弥生時代の住居から当時の生活が良好にわかる例を得ただけでなく、当時の集落景観を考えるうえでもすばらしい成果が得られたと言えるでしょう。

また、室町時代の鍛冶炉をもつ集落跡は、当時の一般的な生活を知る上で重要であり、また弥生時代と同様、集落立地に検討すべき点が多いと言えるでしょう。

おわりに

今回は、市道の通る部分の発掘調査であり、非常に幅の狭い範囲の発掘調査となりましたが、太古の集落立地を明らかにすることができ、また弥生時代の良好な焼失住居が見つかるなど、重要な成果が得られました。

赤穂市教育委員会生涯学習課 文化財系のWebサイト
「赤穂市の文化財」好評公開中！！
<http://www.ako-hyg.ed.jp/bunkazai>



有年牟礼・井田遺跡 焼失住居実測図